

自然・文化を生かした交流による 活力と心豊かな暮らしのある村

—山里の「智」と「技」から創造する持続可能なむらびづくり—

村の概要

◀行者杉：大王杉
(樹齢約600年、樹高55m、幹周り8.3m)

東峰村は福岡県中央部の東端にあって、大分県との県境に位置し平成17年3月に旧小石原村(1,190人)、旧宝珠山村(1,711人)の2村が合併し総面積51.93平方キロ、世帯数約940戸、人口約2,900人の村として誕生しました。当時は、村同士の合併で人口も少ないと本小さな合併とも言われました。

村の北部には、日本三大修験道の一つ栄えた英彦山修験道の修行場が点在し、小石原地域は行者や信者の集まる宿場町として栄えていました。往時修験者が峰に入りする際、杉の穗を植える慣わしによって植栽された樹齢500年を越える杉の巨木群が行者杉の名で親しまれています。また、分水嶺の釈迦ヶ岳(844m)、大日ヶ

総面積のうち山林・原野が86%を占め、村を囲むように標高500mから900mの急峻な山地が迫り、その豊かな森から生まれる流れは大肥川となつて中央部を南へ貫流し、大分県を経て福岡県へ流れ出ます。北部にある小石原盆地からは小石原川となって西へ貫流し福岡都市圏の水瓶、江川ダムの水源となっています。これらの川は、いずれも筑後川に合流し遠く有明海へ注いでいます。



福岡県 東峰村 とうほうむら

▲日本の棚田百選：竹地区的棚田



▲小石原焼
飛びかんな大皿

▶高取焼：水差し

岳（830m）といった山々は山を神聖視し崇拝の対象とする山岳信仰に因んだものと考えられ、ふもとの岩屋神社には修驗に関する遺構のほか周辺には凝灰質角礫岩などが織りなす奇岩が数多く点在し、希少な植生とともに県の天然記念物に指定され一帯は耶馬田彦山国定公園の一帯を担っています。

村の産業は、第一次産業（農林業）、第2次産業（製造業）を中心となっています。農業は、小石原盆地を除き谷あいの傾斜地に耕作面積が狭い田が規則的に集積し棚田を形成しています。古いものでは約400年前に造られていたと考えられ、まさに日本の原風景とも言える景観を呈しています。

製造業の分野では、約350年以上歴史を持ち藩の御用窯として繁栄した高取焼や小石原焼の製陶業が中心となっています。かつては世襲制で英彦山参拝の土産用德利や大型カヌ、鉢などの荒物づくりが主流でした

（1）背景

東峰村は、福岡県内で唯一ブロードバンドゼロ地域でしたが、平成18年3月、当時の麻生福岡県知事の「移動知事室」で東峰村を訪れた際に、村民がその現状を伝えたことが大きなきっかけとなり、福岡県や慶應義塾大学と連携のもと、同年11月に「東峰村活性化戦略研究会（東峰村元気プロジェクト）」を発足し、情報技術を活用した地域課題の解決に向けたリーダー育成を目標に掲げ、①住民ディレクター育成（映像制作プロジェクトを通じた総合的な企画力の養成）、②インターネット市民塾（いつでも、どこでも、だれでも講師、受講生になれる学びの共同体）、③鳶雛塾（地域をテーマにした教材を活用したディスカッション教育による戦略的思考の涵養）の3つの情報化プロジェクトに取り組んできました。

平成20年3月に公設民営方式によ

が、後に「用の美」を唱えた柳宗悦、バーナードリーチ（英國）らによつて全国に紹介され生活雑器へと転換し、昭和50年に伝統的工芸品に指定され独特の装飾技法を50数軒の窯元が伝統を守りながら現在に伝えていまお。

ICTを活用した地域活性化の取り組み

（1）背景

（2）事業の目的と経緯

A D S L によりブロードバンドゼロ地域は解消されたものの、中継局からの距離により通信速度の遅速が発生しユーザー間の不公平感が生じてきたこと、加入者が増加し、中継局の許容範囲が不足してきたこと、また、平成

り、念願のブロードバンド（ADSL）が敷設され、これまでの取り組みを継続的・自立的なものとするため、バーチャルとリアルの関係を融合させるメディアカフェ構想を打ち出し、平成20年8月に地域SNS「トーカー Media Café」をネット上に開設し、平成21年3月に人々が集い交流を行う場「東峰メディアカフェ」をオープンし、住民ディレクターや東峰そんみん塾で制作したコンテンツを登録・発信するとともに住民相互の交流促進を図つてきました。



▲平成25年3月から、とうほうテレビのホームページを運用



▲とうほうテレビの収録状況

23年7月の地デジ完全移行に伴い、村内の43%の視聴を占める共同視聴組合が地デジ対応を迫られていたことなどを踏まえ、国がコビキタスネットワークの整備を進める中、情報通信は、電気や水道と同じく生活に密着した重要なインフラ整備と位置づけ、平成22年度に村内全域を対象に、光ケーブル網を構築しました。

民が連携・協力して、親しみのある番組づくりに努めています。また通信の分野では、一ＲＵ方式により村内全域で光インターネットを利用する」とができるようになっており、現在では、全世帯の3分の1にあたる約300世帯でサービスを利用しています。また、情報通信を活用した安否確認システムを導入し、独居高齢者を行政・地域・家族が一体となつた見守りシステムを取り組んでいます。

(3) 今後の展望

情報通信の分野は日々進化し、新しいサービスが展開されていく中、住民福祉の向上、地域経済の活性化、行政サービスの効率化を図る上で、ICTの効果的な利活用が今後さらに重要になってくると思われます。村では、これまでの取り組みを踏まえ、地域ＳＮＳやケーブルテレビ事業の長期的な安定運営を図るとともに、医療、福祉、防災、教育分野など村民の生活に深く関わる様々な分野において、ＩＣＴ利活用の検討を進めてまいります。

小中一貫校「東峰学園」の開設について

(1) 背景と経過

東峰村には、町村合併以前の昭和59年に学校組合として統合された東

峰中学校と旧村ごとに小石原小学校、宝珠山小学校の2校がありました。過疎化にともなう児童数の減少が問題となり、平成18年10月に「東峰村保・小中一貫教育審議会」を設置して、この問題を審議することになり、2年半にわたり審議を重ねた結果、平成21年3月に、「小中一貫校を平成23年4月に東峰中学校の施設を増改築して開校することが望ましい」との報告書が出され、村も同報告書に沿った形で小中一貫校の開設に踏み切りました。

同年6月には、学校づくり部会、学校教育部会、広報部会、事務局会から成る小中一貫校開設準備委員会を設置し、どのような学校を建設するのかについては、学校づくり部会で協議し、住民アンケートや専門家の意見を取り入れ、平成21年12月に基本設計を、翌22年6月には、実施設計が完了し建設工事に着手しました。また同時進行で校名、校歌、校章、制服、通学路、閉校式、開校式も同部会で協議。教育目標、学校経営全般については、校長を中心とした学校教育部会で取り組み、各部会の経過報告については、広報部会でとりまとめ「広報東峰」に掲載し、各部会がスムーズに運営されるよう事務局会が連絡調整を行い、各部会で受けられた各種の提案は、開設準備会で最終的な決定として承認を得ながらの進



▲小・中一貫校 東峰学園「小学校・中学校一緒の入学式」

行となりました。平成23年2月末に校舎が完成し、3月に数度にわたる引越、統合される小学校の閉校式、そして4月に小中一貫校開校の運びとなりました。短時間の内に多くのことを協議・決定し、実行しなければならぬ非常にタイトなスケジュールの中での事業実施でした。

(2) 事業実施にあたつての課題

過疎地域にとって学校は、地域アイデンティティの要となる施設であり、学校だけは残して欲しいと云ひ地域の強じ思いがありました。しかし一方で、児童・生徒の減少によって十分な教育環境の提供が、ますます困難になつて行く状況であり、非常に難しい判断の

行になりました。平成23年2月末に校舎が完成し、3月に数度にわたる引越、峰学園開校後、いろいろな所から視察の依頼がありましたので、視察の理由をお聞きしたところ、過疎地域に限りず、多くの自治体で同じ悩みを抱えていました。人口が少ないと云ふことが分かりました。これまでどうなつていく状況の中で、これまでどおりの体制を維持していくことは、とても難しい時代となつたことを痛感させられました。

(3) 展望

小中一貫校「東峰学園」は、まだ始まりたばかりで、学校づくりはこれからが本番です。幸いなことに、この事業の推進母体であった一貫校開設準備委員会から、開校後も学園を守り育てていく組織が必要ではないかと云ひございました。児童・生徒だけでなく、学校、家庭、地域の皆さんのが一体となつて、すばらしく学校づくりを図りたいと思います。

地域資源を活かした村づくり

東峰村は年間約90万人の入り込み客数を数えています。その内、春と秋に開催する民陶むら祭には、合わせて約14万人の観光客が数日間に訪れます。その他、棚田や修験などの歴史的遺構やキャンプ場などの交流施設、ホタル

▲小石原地区皿山・小石原焼の天日干し



や湧水などの自然環境にも恵まれ、百選に指定された觀光資源も村内に点在しています。

村の觀光を支える小石原焼・高取焼は、県内の小学校で伝統工芸品の学習教材として教科書にも掲載されています。そのため小石原伝統産業会館には、年間約8,000人の児童が訪れ陶器の歴史を学び陶器づくりをとおして「技」と「人」に触れ、自分たちの普段の暮らしとの関わりなどについて学ぶ「學習の場」としても活用されています。また、年間を通じて素焼きの団に絵付けをする「絵付け体験」から

本格的な陶芸教室まで自分に合った体験メニューを選択できるなど体験型観光にも力を入れています。平成20年6月に環境省から平成の名水百選に選ばれた「岩屋湧水」は、JR口田彦山線の新迦岳トンネル(4,378m)の中央付近からトンネル掘削の際に湧き出た水で、日量15,000tの湧出量があり1年を通じて安定していることから昭和38年から村の簡易水道の水源としても利用しています。この水は硬度30度の軟水で、まろやかな口あたりからお茶、コーヒー、に適していると多くの方が水汲みに訪れるようになったことから、平成14年に無料の水汲み場をJR筑前岩屋駅前に整備したところ、一部の利用者が大量の水を汲むことによる場所の独占や路上駐車による通行の妨げなどのトラブルが地元の方と度々発生しました。そのため、自動給水機を設置し、紫外線殺菌による安心・安全な水の提供を行うと共に料化に踏みきつたところ、水汲みマナーの向上が図られトラブルを解消することができました。今後は、この湧水を更に活用した地域振興策に取組んで行きたないと考えております。

村にはJRの駅が3つあります。戦後から昭和38年頃まで村は炭坑で栄え石炭搬出のために鉄道が敷かれ坑口近くには駅が建設されました。石炭産業

の恩恵のひとつと言われる鉄道の中で県境に位置する宝珠山駅のプラットホームは3分の1が大分県に位置するため九州で唯一、県境がとある駅として知られています。

また、縦貫するJRの駅舎間には4つのめがね橋があり、その内3つが九州の近代化遺産に指定されています。年末年始にはライトアップが行われ、澄んだ夜空に浮かび上がる幻想的な姿は、まるで「銀河鉄道」を思わせると写真爱好者もその時期には多く訪れます。

棚田百選一帯は、美しい日本の歴史的風土準百選「竹地区的棚田及び岩屋神社などの山岳信仰遺跡群」にも指定されています。何でも願いが叶うとされる「玉」が宝珠石をホームは3分の1が大分県に位置するため九州で唯一、県境がとある駅として知られています。

また、縦貫するJRの駅舎間には4つのめがね橋があり、その内3つが九州の近代化遺産に指定されています。年末年始にはライトアップが行われ、澄んだ夜空に浮かび上がる幻想的な姿は、まるで「銀河鉄道」を思わせると写真爱好者もその時期には多く訪れます。

棚田百選一帯は、美しい日本の歴史的風土準百選「竹地区的棚田及び岩屋神社などの山岳信仰遺跡群」にも指定されています。何でも願いが叶うとされる「玉」が宝珠石を



おわりに

村では、先人達が自然の恵みから豊かな価値を生み出し育んできた「智」と「技」を今に継承し、地域の特性や伝統を活かし精神的にも、また経済的にも豊かさを感じることのできる満足度の高い暮らしを創造していくことを目的として「智に学び誇りの持てる村」、「技を交流に活かした豊かな村」、キーワードとして持続可能な村づくりを基本理念としています。

総務課長 泉 和隆

「食」と「器」でつながる・おとぎの里

有田町の概要

有田町は、平成18年3月に「やきもの里」有田町と「農業の里」西有田町が合併し、誕生しました。町の位置は、佐賀県の西部で、北

に伊万里市、東に武雄市、県境を挟み西は長崎県佐世保市、南は長崎県波佐見町と接しています。これら周辺都市部とは直線距離にして、伊万里市8km、佐世保市15km、佐賀市40kmのところにあり、町の東西を、JR佐世保線が横断し、佐賀まで40分、博多までは80分で行けます。

道路交通では県内主要幹線である国道35号線が東西に横断し、伊万里、唐津、福岡都市圏へ伸びる国道202号線が南北に縦断しているほか、北部に国道498号線が通っています。波佐見町との境に西九州自動車道・波佐見有田ICがあるので、長崎自動車道、九州自動車道を利用すれば福岡までは80分で行くことができます。また、福岡空港・佐賀空港までは車で70分、長崎空港までは40分と、主要都市・施設からも利便性の高い交通環境にあります。

▲棚田の風景

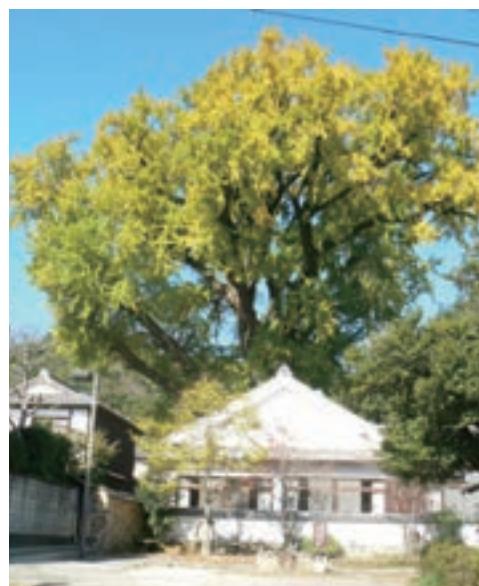


有田町は、面積65・8kmのうち、約



佐賀県 有田町 ありたちょう

▲100万人で賑わう有田陶器市



燃料となる松の木が豊富であったことや地形的な条件の良さなどから急速に発展を遂げました。

しかし、その後のバブル崩壊の波が、例外なく産地にも大きく及び、旅館・飲食店関係との大規模取引の減少、

1650年頃にはヨーロッパに輸出するまでに至り、マイセンやセーブル等の世界の陶磁器産業に大きな影響を与えました。

しかし、その一方で有田町を支える、400年の歴史を持つ「やきもの」と稻作・畜産を中心とした「農業」の二つの産業が、今、危機的な現状に至っています。

農業に関する現状

有田町の農業は、水稻が主要な産物ですが、肉用牛やブロイラーの飼育

も盛んで、特に肉用牛は「佐賀牛」として関西や関東方面に出荷され、好評を得ています。また、山の地形を利用したぶどう（日峰）やみかん・茶の葉、

平野部では玉葱や大豆が昔から栽培されてきました。最近ではアスパラや金柑などのハウス栽培も盛んになつており、多様な生産が行われています。

しかし、やはり他の中山間地域同様、農業従事者の高齢化と農産物の価格低迷などによる後継者の減少、農業

目的別に組合を設立するなど、製造から販売に至る分業体制を確立し、91年のピーク時には2500億円を売り上げるまでの地場産業として発展しました。

しかし、その後のバブル崩壊の波が、例外なく産地にも大きく及び、旅館・飲食店関係との大規模取引の減少、

安価な輸入品の流入やライフスタイルの変化などにより、売上はピーク時の4分の1まで落ち込みました。現在では、窯元の従業員も半減するなど、有田焼を取り巻く環境は伝統産業存続に危機的な状況にあります。

6割を山林・山岳が占め、農地は1割強という全国に点在している中山間地域のひとつでもある普通の田舎町ですが、美しい景観を誇る田園地帯や黒髪連山など豊かな自然に恵まれ、観光資源は豊富に揃っています。

町には、有田の歴史を語る上で外すこときれない国指定史跡である「泉山磁石場」や高さが40mもある樹齢千年の国指定天然記念物の大公孫樹（おおごちよつ）、登り窯の廃材などを利用（現代風に言い換えればリサイクル）して作られた堀「トンバイ堀」、

磁器製の鳥居と狛犬がある陶山神社などがあり、「やきものの町」なりでの風情に触れることができます。ついで、日本の棚田百選に選ばれた「岳

やきものの産業の現状

有田町は、1616年、朝鮮人陶工李參平により、有田泉州で陶磁器の原料となる陶石が発見され、日本での風情に触れることが出来ます。ついで、日本の棚田百選に選ばれた「岳



▲磁器製の鳥居と狛犬がある陶山神社

有田町は、1616年、朝鮮人陶工李參平により、有田泉州で陶磁器の原料となる陶石が発見され、日本での風情に触れることが出来ます。ついで、日本の棚田百選に選ばれた「岳

のグローバル化により、有田町の農業を取り巻く環境も大変厳しい状況に置かれています。

「食」と「器」の二つの危機を利用した地域活性化

二つの産業が危機的状況であることをかり、各自だけで再生を図るではなく、互いの相乗効果による地域活性化策として、【食】と【器】の地域づくりをテーマにし、有田町に多数の人々が集う交流観光の場を形成することを考えました。そこでのごだわりの食と器の販売を、陶磁器と農業生産額の確保につなげ、さらに後継者育成という流れを生みだし、有田町の再生を図っていこうとしたのです。

平成20・21年度と国からの「地方の元気再生事業」の補助を受け、有田町地域活性化協議会を事業主体に九州農政局と連携を取りながら、この事業の実施にあたりました。

町屋でのおもてなし事業とICTを活用した情報の発信による集客

これまでの有田町は窯業・農業とともに生産を中心であったため、町を訪

れる人への対応が十分ではなく、各種の地域資源・観光資源は数多くあるにも関わらず、4月29日から5月5日の

有田陶器市以外の観光客は少ない状況でした。しかし、有田を訪れる人に、提供方法を工夫すれば、四季を通じた交流人口・観光客増大の可能性を有していました。

そこで、有田を訪れる観光客などに対し、有田の窯元や農家が有田の特色である食と高感度の高い食器を用いて町屋でもてなす事業を展開していくと同時に、ICT等を活用し、情報の発信をするなどしました。

その波及効果として、有田陶器市以外の期間で観光客を集め、

○有田の魅力を再認識してもらう行事での通年観光

○有田の和牛や棚田米等のごだわりの食材の各流通販売チャンネルの拡大

○もてなしの食にマッチした有田焼デザインによる陶磁器新商品の開発の意識付け

○観光客への販売による産地活性化を目指しました。

（具体的な取り組み）

取組① もてなしの食材づくり

プレハブの販売所「あじさい村」を設置して、こだわりの食材を利用して加工食品の試食・販売。また、ピザやそば打ち研修などの人材育成。

特に加工品の開発では、佐賀大学の指導により有田産鶏の燻製、金柑ゼリー、金柑もちなどをつくり、生産から販売までのシステムを確立。

▲11月のおくんちご膳（小路庵）
「あじさい村」



取組② もてなしの場づくり



町屋を利用した通年レストランの営業に向けた人材育成。11月は「おぐわんちご膳」、12月は「窯場の夜食」、3月は「雛ご膳」といった地場農産物を利用した季節ごとのご膳料理メニューを作り上げ、「伝統行事と行事食を楽しむ会」での観光客へのおもてなし。

またイベント時の空き店舗などの活用により、有田ならではの立ち寄り拠点を増やし、街中の回遊性をアップ。江戸・明治・大正・昭和の各時代

取組③ 有田通年観光体制の整備

▶加工食品などを販売実験している

を代表する町屋が連なつてゐる地区（1991年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定）を中心に、観光客への滞在時間の拡大を図ると共に、街中の散策を楽しんでもらいための「裏路地ルートマップ」の作成。



また、有田町内の各種催事のポスター・チラシの作成、旅行雑誌への掲載、首都圏での記者発表など集客のための情報発信のほか、やきもの体験と近辺宿泊施設を組み合わせた旅行商品の開発。

取組④ 持続的な推進体制の整備

観光振興事業推進拠点である有田観光情報センターによる観光情報の収集・発信の一元化管理。

また新「有田ブリュンデ」の確立と認知度アップを図るため、有田町の観光、地域と人々の魅力を紹介するホームページ「ありたさんぽ」を開設。日本語および英語・韓国語での、国内外へ向けての情報発信。

（ありたさんぽのアドレスは<http://www.arita.jp>）

は有田町地域活性化協議会の事務局として、会議の調整、連絡会計業務等を担当し、実施しました。

これから展開へ

「食」と「器」のまちづくりを継続的に実施するための人材育成や組織の設立ができ、交流型観光を核とした地域づくりの推進体制が整備できました。今後は現在の活動を継続し、更なるステップ（体験・民泊を取り入れた有田型ツーリズムの構築）を目指していく予定です。

▲町屋を改修したおもてなしの場

＜実施体制＞

平成19年度に策定した地域活性化プラン「食と器」の策定委員会のメンバーを主体に、有田の魅力発信のため東京で活動するメンバー（情報技術活用、町屋等の不動産再生、映像技術等）を加え、地元大学や高校、各種研究機関などの協力も得て「有田地域活性化協議会」を組織し、事業実施体制を整備しました。

また平成22年度からは官民協働で地元経済の立て直しを図る「総合経済対策会議」を発足しました。これまで行政主導による対策が実施されてきましたが、今回は窯業、農業、観光といった業界からの声をより反映できる民間主導の体制、トップダウンからボトムアップ方式による政策の構築を図る組織運営になっています。

このことにより有田町内の窯業関連の商工業、農業、まちづくり団体、女性団体等のほとんどを網羅した実施体制で取り組みました。なお、有田町

＜官民協働の体制確立へ＞

即座に取り掛かれる事業については23年度から実施し、地元経済の再生に取り組んでいきます。

有田焼創業400年

最後に、2016年は有田焼創業400年を迎えます。これから実行委員会の設立など準備に取り掛かっていますが、様々な記念事業が単なるイベントで終わるのではなく、窯業再生への起爆剤となればと考えています。

各業界から選ばれた委員の方々で、商工観光課 主査 森田剛史（平成23年1月31日付第2747号）



大豆焼酎「嘉島」誕生 — 嘉島大豆をブランド化 —

ゆたかさ実感!
水の郷——嘉島——

「水の郷」かしまは、昭和30年に六嘉村と大島村が合併し、嘉島村となり、同44年に町制を施行した東西に9・8km、南北に3・9km、面積16・66平方



▲公園化された湧水池でのんびりと釣りをする人と水鳥たち

kmの熊本市の南部に位置している町である。

熊本平野に属した海拔5~8mほどの平坦な水田地帯で、東地区の一部に丘陵地帯があり、四方を緑川、加勢川、矢形川に囲まれている。

大地の裾野を中心には蘇の伏流水といわれる湧水群があり、県下で初めて「水の郷」に認定された。

1日に13万トンの湧水量をほこり、水温は年間を通して18度といふことで、鯉や鮎、鰻、ハエ、エビと魚類も多く、魚つりも楽しめる。冬場は水鳥が飛来する約3haの広さを持つ「浮島さん」をはじめとして、一大湧水群を形成しております。公園化も進み、四季を通じて憩いの場として町内外から多くの人で賑わいを見せている。平成の名水百選にも「六嘉湧水群・浮島」が選定された。

文化遺産としては、5世紀頃のとされる国の重要文化財指定の装飾古墳「井寺古墳」をはじめ、県の重要



熊本県 嘉島町 かしままち

▲1日の湧水量13万トン、年間の水温18度、水の郷かしまのシンボル「浮島さん」

無形民俗文化財の「六嘉の獅子舞」(勇壮な獅子舞や牡丹の花が舞つ「タナ登り」)が見どころ)、手足の神様として深い信仰を集める「足手荒神」などがある。

本町は、周囲を河川に囲まれていて、かつては水害の常襲地帯であり、町の発展に大きな妨げになっていたが、平成11年に長年の懸念であった加勢川の河川改修が概ね完成し、町土の自然災害に対する治水安全度が高まった。



▲六嘉の獅子舞
五穀豊穣を願って先輩から後輩へと受け継がれていく

さらに、熊本都市圏の都市機能の一翼を担い、農業・流通・工業等の面で熊本市を補完する役割も果たし、就業機会や文化・医療施設利用

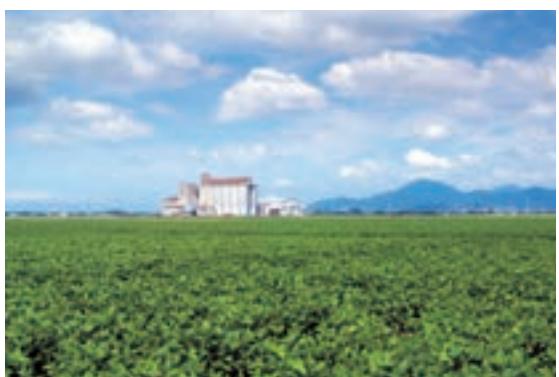
など都市的な利便性とともに、九州縦貫自動車道御船インター、エンジに近く、交通アクセスの利便性にも恵まれている。

圃場整備された農地を利用した農業中心の町から、近年、ビール・清涼飲料工場や大型商業施設が進出し、農業と商工業のバランスの取れた町となっている。

「フクユタカ」を使った特産品焼酎「嘉島」が誕生!

本町の基幹産業である農業は、米・麦を基幹作物としているが、農家の減少、農業従事者の高齢化が進むなか、集落営農を支える核として若手営農者を中心とする認定農業者や営農組織の育成を図り、水や農耕に適した土地活用を活かした経営の安定・規模拡大を目指している。

転作作物としている大豆は、都市近郊でありながら、圃場整備済みの水田で土地利用型農業を展開し、米の転作作物として地域輪作による転作大豆の団地化に取り組み、集団化した大豆栽培面積は県内最大規模となっている。豊かで清冽な水とその水で育まれた良質な大豆「フクユタカ」を使った



▲ブロックローテーションにより整然と植られた大豆

本町の特産品として、大豆焼酎の調査開発に取り組み、一般公募した中から「嘉島」というネーミングで、平成21年の4月末に発売、初年度としては限定2千本を販売する運びとなつた。本町は、湧水や表流水に恵まれ農耕に適した平坦な土地を活用し、安全で安心できる農産物の米、麦、大豆のほかイチゴ、トマトなどの作物を生産しているが、この農産物に付加価値をつけた加工・販売までは至つておらず、加工した町の特産品もなかつたところから、大豆を使った特産品づくりを目的として大豆焼酎の開発に着手した。

原料の大豆については、嘉島町で生産された大豆が全て農協に出荷され、原料の大豆については、嘉島町で生産された大豆が全て農協と交渉し、酒造メーカーへの持ち込みを委託するとともに、酒造会社についても選定を行い、熊本県球磨郡の酒造メーカーにお願いした。

免許の取得ができないことや原料である大豆の特性や成分について、タンパク質、油分が多く、製造に関しては技術的に難しいことなどから事前調査を行い、最初から本格的に製造するのは危険であるとの専門家の意見で、平成20年5月に「嘉島町産大豆を利用した大豆焼酎醸造に関する研究」として原料の加工方法、主原料と副原料の配分比率等の調査を、研究機関の熊本県産業技術センターから試作品の官能検査依頼があり、各団体等の代表からなる17名の試飲メンバーを選定し試飲を行った。その結果、十数種類の試作品の中から、香り・味・原料の特性を考慮したうえで、飲みやすく、消費者に受け入れられやすい減圧蒸留方法によるものが選ばれた。

販売については、地方自治体では小売業免許の取得ができないために、販売が可能な町内のショッピングセンターや酒店、コンビニエンスストアと

交渉し、酒造メーカーから直接仕入れ販売してもらつた」とした。

大豆焼酎のネーミングについて

町の広報誌及びホームページ・新聞に掲載し、広く一般から公募した。結果、県内各地から195件の応募があり、名称選定会議で、町のPRにつながるとして大豆焼酎「嘉島」に決定。ビンの種類も決まり、命名者の表彰や大豆焼酎の印に「背景が緑ひろがる大豆畑」をラベルに決定して町の特産品として大豆焼酎「嘉島」を商品化した。

地域活性化は、全国的に珍しい大豆焼酎で

恵まれた土地基盤で営む大豆については、農業経営の効率化の一つとして、同一品種を栽培し、農地を集積して団地化を図り、良質な大豆の生産に努めており、熊本県内第2位の作付面積・生産量を誇っている。

また、平成19年7月に中小企業地域資源活用促進法に基づき、県が国の方針に従い、地域産業の創出の核となり得る地域資源として本町の大豆も特定されている。

今回、数少ない農産物の特産品である大豆を使用し、更なる地域振興及



▲全国でも珍しい大豆焼酎「嘉島」

全国的に珍しい大豆を使った焼酎は、本町の新しい名物とすることことができた。

大豆焼酎「嘉島」の売れ行きが好

評のために平成22年度は前年度の倍の4千本を製造することとした。

町としても今後の醸造計画については、たとえば季節による品切れを防ぐ手段はないか、嘉島の最大の資源といえる水を活用できないか、醸造する適正量の再検討などを醸造元と緊密に連携するとともに、関係機関とも連携しながら継続できるよう嘉島の特產品の伸長を図つていただきたい。

関係機関との連携で大豆の商品の開発を目指す

画して全国的に珍しい大豆をつかつた焼酎を開発し、本町の新しい名物にと考えた。

また、大豆生産農家の女性で組織されてる「水の郷加工グループ」があり、自家製の大豆を使った饅頭やマフィンなどの商品を開発され、「ふるさと食の名人」の認定も受け、活動されている。

今後においては、生産農家、組織や団体等と行政が連携しながら、湧水・表流水を活かした土地活用を行い、安全で安心できる農産物の生産と付加価値のある加工食品の製造販売や特產品づくりを図りながら、地域の特性を活かして経済効果を高めるために、町民を巻き込んでのアイディア等を募集して、新たな商品の開発を目指し、努力する必要がある。

商工会女性部が起業 ～「大豆工房かしま」～

町商工会では、企業誘致や大型ショッピングセンターの出店により来町者の数が急激に増加、町の人口も増え傾向にある中、これらの環境を地域の経済に波及させる仕組みづくりが求められ、商工会の女性部が中心となつて、熊本県内でも有数の収穫量を誇り、栽培技術が高く品質の良い嘉島大豆を活用した商品開発に取り組むことになった。

取り組みの内容及び商工会の支援として、熊本県の補助事業や全国展開支援事業により、地場産業の第6次産業化、地域経済の活性化、地域ブランドの確立を目指し、商品開発の手法導入等により、23種類に及ぶ試作品が完成した。

また、メディアを通してのアイディア収集と事業紹介により、嘉島町での大豆の取り組みが認知された。

この嘉島大豆を利用して、「商工会女性部メンバー10名が、嘉島大豆を中心とした商品開発を目的に、嘉島町なりではの逸品を開発したい。嘉

▲商工会女性部が開発した安全・安心で、
なおかつおいしい大豆商品



県が実施した「農商工連携百選」に選定され、熊本県商工会連合会が実施した「首都圏流通関係者が発掘した一品55選」に認定されている。

今後は、主原料である嘉島産大豆は市場に出回らなければならないため、農協から直接確保する必要があるが、大豆は産地づくり助成金の対象で制度が廃止となつた場合に備えて、生産者からの調達も含めて、生産者を維持するためにも嘉島大豆のブランド化を早急に図ること共に、食の安全がより重要な問題になってきた今日、消費者の安全な食生活にも大きく寄与することを期待している。

島町を町外に強くアピールできる特産品をつくりたい。」そんな思いを実現するため、製造販売を手掛ける「株式会社 大豆工房かしま」を設立して食品製造業、販売の許可を受け、通信販売等の販路開拓も進めてくるといひであり、商工会から起業する例は全国的にも珍しく期待を集めている。

開発された食品は卵を一切使わず、材料にこだわり、低コレステロールの健康志向の強い商品に仕上がり、大ヒットレッジング「畑の貴婦人」は熊本

都市を目指している。

自然豊かな郷づくりでは、湧水や河川、地下水の恵みとともにあつた本町の歴史を尊び、また未来に受け渡す財産として守り育み、水だけでなく田園等の自然的環境を暮らしや生産の基盤として、自然の豊かさ、恵みをあげてやる郷づくりを進めている。そこである。

暮りしの場、豊かな郷づくりとして、安全で安心できる暮らしのために、より一層の危機管理と災害への備えを進め、いにしへ豊かな郷づくりでは、地域での相互の助け合い、子供やお年寄りを見守る温かさが、心のゆたかさに

とや伝統生活文化の継承にとても重要で、安全安心な食料生産と効率的な生産のしくみづくりを進め、工業・商業・流通等においても、熊本市に近いことや九州横断自動車道延岡ルートの整備等の立地特性を活かす産業振興を図り、経済的にもより豊かなまちづくりを進めている。

あずな豊かな郷づくりでは、まちづくりや地域活動に住民と行政が連携して役割を發揮していかれるようには様々な情報を共有できる仕組みを進めている。

以上のように、心の豊かさ・自然の豊かさとともに経済や暮らしの豊かさを大切に充実させ、「真の豊かさ」を実感できる暮らしの実現にむけて邁進している。

企画情報課 下田 弘美

▶水の浄化と環境学習を学ぶ子どもたち



(平成22年5月24日付第2720号)

個性と知恵と協働で創造する 豊かなまちづくり

—自然と文化と温泉のまち—

はじめに、さつま町の簡単な地勢と特性を紹介いたします。

自然を満喫できる町

さつま町は、平成17年3月に旧宮之城町・鶴田町・薩摩町の3町が合併して誕生した山紫水明の静かな町です。現在の人口は24,109人（平成22年国調）で、鹿児島県の北西部、鹿児島市から約50kmに位置し、周囲を山々に囲まれた盆地で面積は303.43km²、町のほぼ中心を南九州一の大河である「川内川」が貫流しています。

社会基盤では、主要都市に通じる国道267号、328号、504号が市街地を中心として放射状に整備されており、更に現在、504号についてては、空港にアクセスする地域高規格道路としても整備が進められています。観光としては、町内各地に湧き出る温泉で癒される湯の町としても知ら

れ、また、豊富な緑と水を活かした「県立北薩広域公園」「観音滝公園」は、県内外のお客で賑わっており、その他、ホテル・ゴルフ場を備えた滞在リゾート施設もあります。

豊富な温泉で心が癒される町

宮之城温泉、紫尾温泉、観音滝温泉をはじめ、健康増進施設など21カ所もの温泉施設があり泉質が良く、歴史のある温泉のまちとして名聲を誇っています。

なかでも、紫尾神社拝殿下に源泉をもつことから、「神の湯」の名を持つ紫尾温泉は地域の人々や町内外の多くの方々にも愛されています。

毎年5月下旬になると地区内にホタルが飛び交い、幻想的な光景を露天風呂から眺められるのも魅力のひとつで観光客に人気のスポットです。



鹿児島県 さつま町

▲大石神社秋季大祭 兵児踊り

術、伝統芸能などを組み合わせた複合的交流環境も整っており、温泉施設を

核に、川内川を活用したホタル舟の運航など数多くのイベントや観光公園、

観光農園、体験農業など、グリーン・ツーリズムの滞在型交流人口の増加に向けた取り組みを進めています。



▲紫尾神社

◀ 桜野ひがん花祭り

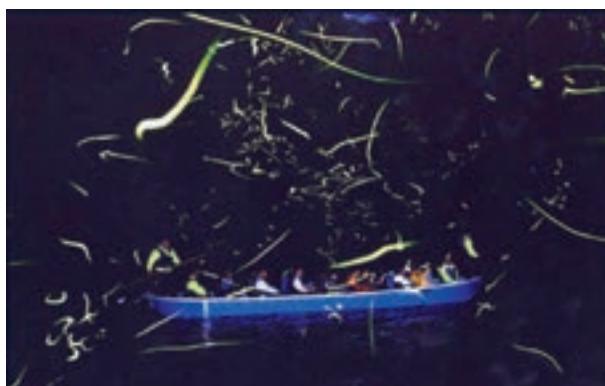
受賞しました。なお、ホタル舟の運航は、町内2ヶ所で行っており、それ以外の地区でも鑑賞できます。

平成18年7月の豪雨災害でホタルが激減しましたが、現在では地元住民の方々やボランティアスタッフの懸命な努力により、徐々にホタルたちが最盛時に近づいています。

自然を活かした手づくりイベント

先ず「奥薩摩のホタル舟」について紹介いたします。

奥薩摩のホタル舟運航が始まったきっかけは、地元新聞に川内川の岸辺でホタルが乱舞する模様が掲載され、



▲奥薩摩のホタル舟



みなさんも、川内川中流域を棹さしによる舟でゆっくりと川下りを満喫しながら、両岸に飛び交つたくさんのホタルの光の乱舞を鑑賞できます。その光景は幻想的で別世界にいるような気分になります。

是非のお越しを！

異文化の導入と新たな交流の創造

合併以前の旧鶴田町が、青森県鶴田町(つるたまち)と全国に一つしか

ないという同町名の縁から平成9年8月姉妹都市盟約を結び、「鶴の架け橋交流」という名称で「五つ太鼓」伝承や「鶴風」の製作技術の交流など、民間レベルの交流や児童生徒同士の北国と南国の交流などを平成17年3月の合

併まで行っていました。

合併後は、新町さつま町となつたため行政同士の交流は数年止まった状況にありました。が、さつま町が平成22

年度に合併5周年を迎えたことと、平成23年3月新幹線で鹿児島・青森間が繋がることを記念して、青森県鶴田町（つるたまち）から伝統芸能の「ねぶた」を贈っていただきました。

◇異文化で町に元気を！

全国的にも名高い「ねぶた」をさつま町夏祭りやイベント等で活用する上で、地域の元気再生の起爆剤にできないか。また、九州新幹線の開業により青森と鹿児島が線路で繋がり記念すべき新幹線開業と交流人口の呼び込みにより、情報発信と地域活性化に大きく貢献するものと確信いたしました。

さつま町も、貴重な郷土芸能を有効に活用するため、関係団体や町民と受け入れ態勢の整備を図りながら、双方の町民が喜んでもらえる演出方法を検討し、5周年記念式典と郷土芸能発

表会の同日夜に町のメインストリートで運行を行うことで調整しました。

11月13日、170人の出席を得て

友好交流の締結式を行い、翌14日には、

中野擊司町長以下総勢85名のハネト・

囃子方などが祭りに加わり、約1時間にわたり街を練り歩きました。沿道に

は、約4千人の見物客が訪れ、笛や太鼓のぎやかな響きと「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声とともに跳ね踊

る人たちと見物客が一体となつて大きく盛り上りました。

◇町民に新たな感動を！

運行後には、さつま町民から「北



◀ねぶたの練り歩き



町の元気は地域から

地域活動支援（地域元気再生）事業は、合併前の平成13年、旧宮之城町が町内13地区（区公民館）自らがそれぞれ地域の特性に応じた特色ある地域づくりを進めるために作成した地域計画に基づき、地域の活性化のための人づくりやソフト事業に対し補助金を交付し、特色ある地域づくりを行つことを目的として創設しました。

その後、平成18年度から22年度までの5カ年間を合併後的第一計画期間として取り組み、平成23年度からは、新たな事業として「さつま町地域元気再生事業」を始めました。

内容としては、新たな地域づくり活性化計画を実現する方策として、地域活性化型事業（区公民館）は50万円を限度として支援します。また、提案

国の本格的なねぶたを間近に見られるとは思ひもしなかつた。感動した。感動をありがとう」といったメッセージが多く寄せられたと聞きました。

このように、異文化に触れることで故郷に愛着と誇りを持てる町を考えるとき、町民の一体性が生まれ、子どもたちに夢と感動を与える新たな文化の創造に向けた1ページが生まれたと思っています。



▲高齢者いきいきふれあいサロン

企業立地の推進による雇用の創出

◇工業を根付かせ、活性化し続ける仕組みづくり

合併以前、旧町ごとにあった企業懇話会等は、旅館業や食品加工業なども含め業種が多岐にわたっていました

が、平成19年度に「さつま町ものづくり企業振興会（会員企業17社）」を設立し、金属・機械製品製造業を展開している立地企業を対象としながら情報交換やニーズの提供を行っています。具体的な取り組みとしては、県内外の優良企業への企業訪問研修のほか、県内他異業種企業との交流会、近隣の高校等12校の進路（就職）指導教諭との意見交換会を開催するとともに会員企業を訪問し、高校生の就職希望状況や企業が求める人材像について活発な意見交換を行っており、これらの活動により企業間並びに関係機関の連携が深まるとともに、企業間の相互研修が地域の雇用創出や活性化を促すことが期待されています。

△三者が連携した 担い手の育成

◇将来を託す担い手づくり

さつま町の農家戸数は10年間で653戸（17%）減少し、65歳以上の農業従事者が70%に達し、耕作放棄地も45haと増加しています。このため、地域農業と集落を守るために効率的且つ継続的な當農が不可欠であるということから、将来を託す担い手づくりを進めるため平成18年

度に「担い手育成支援室」を設置し、「認定農業者の確保と育成」及び「集落宮農の推進と組織化（法人化含む）」を具体的な取り組みとしては、県内外の優良企業への企業訪問研修のほか、県内他異業種企業との交流会、近隣の高校等12校の進路（就職）指導教諭との意見交換会を開催するとともに会員企業を訪問し、高校生の就職希望状況や企業が求める人材像について活発な意見交換を行っており、これら活動により企業間並びに関係機関の連携が深まるとともに、企業間の相互研修が地域の雇用創出や活性化を促すことが期待されています。

△町・JA・県ワンフロアで 担い手づくり

平成18年度から4年間、町とJAが役場庁舎内でワンフロア化を実施。平成22年度から新たに県を加え、平成24年度までの協定を結び、集落宮農を含めた担い手育成ワンストップ機能と体制の強化を図っています。町職員4人、JA職員4人、県職員4人の体制で、三者が同フロアで業務にあたるのは県内での取り組みとなっています。

効果として、三者の機能を活かすことじで、制度、技術、経営及び情報提供面で高度で具体的な指導と支援が可能になりました。このため、特に新規就農者及び認定農業者の巡回訪問等支援の強化と拡充を図り、円滑な就業と経営改善の達成に向けて共に取り組んでいます。

△持続可能な農業・ 農村の環境づくり

農村地域であっても主産業は第2・3次産業が多くを占めています。しかしながら、大半が兼業農家であることから、現状に即した農業・農村の構造改革が求められています。今後も認定農業者等専業農家を中心に集落宮農を含む地域農業の担い手を確保し、共生・協働の体制とシステムを構築することで、農業・農村の維持・存続に繋がればと願っています。

また、県内の町の規模からして認定農業者233経営体、集落宮農（特

度に「担い手育成支援室」を設置し、「認定農業者の確保と育成」及び「集落宮農の推進と組織化（法人化含む）」を具体的な取り組みとしては、県内外の優良企業への企業訪問研修のほか、県内他異業種企業との交流会、近隣の高校等12校の進路（就職）指導教諭との意見交換会を開催するとともに会員企業を訪問し、高校生の就職希望状況や企業が求める人材像について活発な意見交換を行っており、これら活動により企業間並びに関係機関の連携が深まるとともに、企業間の相互研修が地域の雇用創出や活性化を促すことが期待されています。

▲集落宮農甘諸収穫



地元商店街に活力を

「さつま百縁祭」とは、「お客様との信頼関係を築く」との想いから、商店街の有志が立ち上がり平成19年12月の暮市から始まりました。これまでも商店街振興のため、プレミアム付商品券発行や店舗改造等の助成を行っています。最後になりましたが、是非「さつま町」にお越しいただきたいたいと思います。

さつま町 総務課 上野 俊市
(平成23年2月21日付第2750号)



▲百縁祭

島への移住支援に求められること

—サポセンの取組—

種子島U・ーターンサポートセンターとは

種子島U・ーターンサポートセンター（以下、サポセンと呼称）の事務局がある鹿児島県南種子島町は、サーファーのメッカである大隅諸島の一つ、種子島の南端に位置し、種子島宇宙センターがあることでも知られおり、町への移住・定住者は年間100人ほどになっている。サポセンとはその名称どおり種子島への定住を促進する活動を行う民間任意団体で、スタッフの中心が移住者で占められているのが特徴である。相談にきた人は、個別対応でとことん面倒を見る、その人が地元にとけ込めるよう、あらゆる方面からサポートするというのが、サポセンのやり方で、着実に成果を上げている。平成15年5月開設からの8年間を振り返ることで、成功の秘訣が見えてくる。

移住を決意させる理由から考えてみると

サポセンは平成15年以降、種子島へ移り住む人々への支援を行ってきた。初期の目的及び活動内容は、住宅の貸し借りにおけるトラブルの防止や下見などの際の円滑な情報収集のための関係者紹介等を行う情報提供であった。具体的に言えば、借り主が又貸しを行ったり、長期に渡って家賃を滞納したり、「反対に家主が借り主に改装費を負担させ、改装が終わり次第追い出したりするといった事例が続いたため、その防止策として、借り主になる移住者には注意喚起を、家主になる地元住民には賃貸契約を交わすように強く勧めるなどの活動である。

さるに本土から種子島へ移り住もうとする人たちが「移住」という行為を思ついた理由についても考えてみ



鹿児島県 南種子町 みなみたねちょう

▲シーカヤック体験会



◆種子島宇宙センター

ることにした。例えば都市部などに住んでいた人がなぜ遠くの地方へ移り住もうとするのか、そこに何らかの理由があるのだ。

そこで種子島への移住を希望する人たちからの電子メールによる問い合わせのやつとりや、下見に来てもうひとつ時の面談時を利用して聞き取り調査を行った。

理由は、メテイアで取り上げられた写真や文章が綺麗な風景や癒しを感じさせるような文章であるからだ。が、自然を感じて暮りたい」や「自然の多い地域で子どもを育てたい」、「田舎でのんびり暮りしたい」、「毎日サーフィンを楽しみたい」などに分類された。もちろんこれらは理由も全くの無意味という訳ではなく、これはこれで彼らの希望の一画面であることは確かである。

従って、これらの要望に添うような移住後の計画例を示すとして、より具体的な、より詳細な移住計画が作られるよう支援してきた。しかし、これだけでは解決できない問題が残ったのである。転入の数自体は増やせるものの、家主や職場、近隣の人々とのトラブルなどから、元の地へ戻るケースも数件に一件の割合で発生した。相談内容が深くなつた時点や移住後の相談時ににおける転入者本人の経済的な事情、移住以前の仕事の様子や家族・友人たとの付き合いなどの聞き取りや移住後に周囲の人々との付き合い方、話し方などを観察すると、他人との付き合い方、交渉の方法などにおいて、思慮が足りない、拙いとみられる場合が頻

に行つた。建前とも言つべき表面上の理由は、メテイアで取り上げられた写真や文章が綺麗な風景や癒しを感じさせることに也有るが、自然を感じて暮りたい」とにも成りかねない行為であるから、よほどの事情がないと遠く離れた地への移住を決意するとは考へにくく、その主な原因であろう対人関係を悪化させた事情を考えてみると、本人の考え方や性格に起因するものが大半であるが、共通項のひとつにはやはり経済的な問題も感じられる。

繁に感じられた。

職場を急に辞めてみたり、簡単に前言を翻したり、世話をになつた人にも何も伝えず転職や引っ越しをしてみたり、役場に見当違いなクレームを持ち込んだりと、自分の行為や言動が周囲の人々にどのような影響を与えるのか想像できていない場合が目立つ。つまり「サーフィンを楽しみたい」あまり「サーフィンを楽しみたい」あれば「自然に囲まれて生活したい」などといふような願望以前に、住んでいた地を離れたい、もしくは居られないとこの事情が垣間見える。この核心

とも言える理由に、じのよりに対処すれば良いのかが重要なポイントではない

◆海上から島を観察



かと考えた。

家族や親戚、先輩・後輩や同僚、友人たちとの交際を全て絶ち切つてしまつてしまつとも成りかねない行為で、あるから、よほどの事情がないと遠く離れた地への移住を決意するとは考へにくく、その主な原因であろう対人関係を悪化させた事情を考えてみると、本人の考え方や性格に起因するものが大半であるが、共通項のひとつにはやはり経済的な問題も感じられる。

規転入者に積立貯金を強く勧めるようにしてみたり、家賃や給食費、税金などの滞納が減少しただけでなく、周囲の人々とのトラブルもほとんじ聞かなくなつた。「2~3年間の積立貯金を経て、空き住宅や宅地を購入し、自分の不動産を持ちましょ」と、半ば強制の如く感じさせのほどに強く勧めたりと、転入者が未来に希望を持ち、良い結果に繋がつたのではないかと感じた。 (種子島では、積立貯金を経て住

定住支援のポイントとは 貯金可能な就業支援

宅建設や古屋の購入・改築に至つてい
るケースが既に数件でござる。)

だとすれば、定住支援で一つの重要なポイントは、積立貯金を可能にさせるより、仕事に就かせることと聞えただろ。自営業を開業できるような人は別としても、多くの場合でどこかの職場に就く必要がある。種子島も過疎地の一つであり職場の数も規模も都市部に比べて小さいので、就職が難しいものの、それでも人手不足で悩んでいる業界、あるいは人手が確保できるのなら規模の拡大も可能な業界もある。転入者にとっての本業となる就職が必



これから地域での仕事を覚えるにも経験とやる気、定着の必然性のバランスが良いようだ。相談を進める時点から、転入希望者自身のためにも無謀な計画や甘い見通しを許さないよに留意すれば、自然と30代有児家庭が多くなるように感じている。

中高年の転入者では、経験はあるが、やる気がなかつたり協調性がなかつたりする場合もよくみられるが、あまりに若いと即戦力としては役に立たない。一方、30代夫婦で小さな子供がいる家庭は、地域の自治会活動やPTA活動、子ども同士の繋がりなどもあるので、地域にも定着しやすい、この

重要なことはもちろんあるが、サボセントでは、家庭として副業を持つようにも勧めている。大きめの家庭菜園や業務としての栽培・飼養や手芸、ホームページなどを利用した地域の情報発信や地域へ観光客を呼び込むような新しいレジャーガイドショップも出来たこれらを本業の妨げになりない範囲でチャレンジ・継続することで周囲の人々や金融機関などからの信頼度を高め、さらに周囲の人々との様々な関係を密にしていきたい、転入者としての地域での立場をより早く確たるものにするよつ話している。



就業支援は、まず転入者
自身の意識改革から

い労働力不足に悩む定置網漁の事業者や、事業や接客が出来る人物なら雇用したことの販売店など、地域の業界について事前によく調べておくと、どの業界のどの事業所で高齢化しているとか後継者がいないとか、あるいは人手が確保できれば規模を大きく出来そうだ

就職先の話に戻ると、まずはそ
うじつた業界の情報を担当者が熟知し
関係者との連携を図つておく必要があ
る。事業所からの募集を待つていても
始まりない。例として、医師や看護師
介護士、整備士など、あるいは人手が
確保できるなり飼育する牛の頭数や舗
場の面積を増やしたことの農家、若

就業支援は、あくまでも転入者自身に「仕事を得る力」を身につけさせることが肝要である。したがって、転入者へは「転入時に手配する職は、当面の生活を支えるためのアルバイトでその後の職は、田舎す業界の人たちや周囲の人々、金融機関などからしつか

とかを把握しておける。更に、そういう
た事業所の人々に定住促進を理解して
おじてもらえるので、必要な情報をも
じる可能性も高まるだろ。

◆シーカヤックで海上洞窟◆



つ争いで、自身で考えながら、自力で得るよつこ」と話している。転入者に住宅の賃貸や不動産の売買、就職などに優遇すると、周囲の人々との関係にも影響し、転入者自身のためにもなりなじつえ、地域としても、援助していくないと足りないような人物ばかりが集まつても困るだらうと考えたからである。この転入者への優遇という点においては、現実には町役場や議員の方たちとは意見の一一致を得られていなじ。



種子島の西之表市にあるサー

ファーリ連盟の初代会長の「移住してき

たサーファーは弟妹やねん。そやから悪い口トしたり怒るだ」という言葉

かりは、おれに余裕じての覚悟やこ

を増やしたい」と考える商店主たちも心強じ。いのじつた人たちと連携を上手くとることが移住「コンシェルジ」として定住促進を担当する者の役割なのだと想ひ。



ちにとつてはマイナス面が目立つ場合もある。やうにはそういうした噂話が広がつて地方議会さえ影響される場合もある。また、定住促進とは地価を上げるといでもあるので、歓迎されなじ向

きは残る。

多くの人は、数回

のトーブルに会つと

「わつ移住者と関わ

るのはイヤだ。」な

どと被害者になつて

逃げようとする。過

疎社会になつた当事

者意識がないのかも

しない。転入者に

裏切られて心が傷つ

く場合もあるので、

過度な期待は寄せな

れまでの苦労が窺える。「いのじつた人物が各町村におられるなり、せひとも定住促進を担当していただきたい。

その一方で、転入者が来ることによつて直接利益を受けることのなじ業

物が各町村におられるなり、せひとも

定住促進を担当していただきたい。

そのほどんどが極めて短期的な問題で

借りにくくなつた」、「地域の家賃相

場が上がつた」などと、地域の人た

ちにとつてはマイナス面が目立つ場合

もある。やうにはそういうした噂話が広

がつて地方議会さえ影響される場合も

ある。また、定住促進とは地価を上げ

るといでもあるので、歓迎されなじ向

きは残る。

これら地域の人たちにとってのマイナス面は、地価上昇の点を除いて、そのほとんどが極めて短期的な問題であり良いと思ひ、地域の従業員たちや商店主たちと競合することも、その相性が合わない場合は帰してあげるべきなのだと。

地域の一員として出来づ、交流する時間が來るので、やつ週ごとくのつむりで良いと思ひし、地域の従業員たちや商店主たちと競合することも、その地域が活性化に向かつ要素の一つではないだらうか。

足りないのは事業者や企画・営業マン

一方、起業または田園業として開業する転入者もでてくる。料理店や民宿、食品の製造・販売など、地域の特性を理解すれば、その人なりの価値観も併せて新しいタイプの事業所が出来るといもある。都市部から移り住んだ者なり、地方の食材や料理を貰ひ手側の田で判断するのも出来るかひ、よ

や金融機関などからの信頼も得て自らの力で事業を興すことは、地方にとどて素晴らしいことじ」とではないだろつか。

ただ、定住促進活動を実践の方は無難な総会運営を田指すことになり、自治体が資金を提供したところで、予算として計上しやすいイベントの開催やアンケート調査程度の活動に収まり、定住支援を支援するような立ち位置に後退する、つまり主体性からはさらに遠ざかってしまう。定住促進をするグループが一つである必要はないだろ。町村長が把握したうじつなり、それぞれと付き合えば事が足りシビアな商品開発も期待できる。

シーカヤックのガイドショップなど観光客を呼びよつの業種では、やはり利用者側の視点を以て、より有効なサービスを組み合わせたことが成功の要因だろ。彼らは行政などから補助を受けず、自力・自己責任で起業したからこそ強みがあると思ひ。買手側の目線と作り手側の環境・事情の両方を知る人物が多く誕生し、取引先



する、つまり主体性からはさらに遠ざかってしまう。定住促進をするグループが一つである必要はないだろ。町村長が把握したうじつなり、それぞれと付き合えば事が足り、競争の原理の効果を期待したいものである。なにより、定住促進は地域活性化であるから、その地域の意志として主体性をもつて当たるべきだと思ひ。

また、地域のことを、その地域の人々だけが深く理解できているとは限らないのではないか。他地域のことや、より大きな地域の中でのその地域の立ち位置を理解できる人物とい

や金融機関などからの信頼も得て自らの力で事業を興すことは、地方にとどて素晴らしいことじ」とではないだろつか。

ただ、定住促進活動を実践の方は無難な総会運営を田指すことになり、自治体が資金を提供したところで、予算として計上しやすいイベントの開催やアンケート調査程度の活動に収まり、定住支援を支援するような立ち位置に後退する、つまり主体性からはさらに遠ざかってしまう。定住促進をするグループが一つである必要はないだろ。町村長が把握したうじつなり、それぞれと付き合えば事が足

りシビアな商品開発も期待できる。

シーカヤックのガイドショップなど観光客を呼びよつの業種では、やはり利用者側の視点を以て、より有効なサービスを組み合わせたことが成功の要因だろ。彼らは行政などから補助を受けず、自力・自己責任で起業したからこそ強みがあると思ひ。買

手側の目線と作り手側の環境・事情の両方を知る人物が多く誕生し、取引先

の時は、研修という名の観光旅行で他地域へ訪れるだけの人物ではないと思ひ。やはり身銭を切つて利益を上げるべく真剣に勉強しに行つた人物にじて期待したいと思ひ。そういう事業者やその業界を経験した転入者に協力をしてもらいたいときがしてしまふ。

私にとって、種子島の1番の魅力は、人の存在である。例えば、平成23年で86歳になる近所のおじさんは、普段つちへ来て話してくれるこのほどなどが、5年後や10年後、20年後のこ

のには、研修という名の観光旅行で他地域へ訪れるだけの人物ではないと思ひ。やはり身銭を切つて利益を上げるべく真剣に勉強しに行つた人物にじて期待したいと思ひ。そういう事業者やその業界を経験した転入者に協力をしてもらいたいときがしてしまふ。

私にとっては、自分は死んでしないだらけれど…」などと聞こながらも、じうれむ」とが、ただただ嬉しい。

「あの時には自分は死んでしないだらけれど…」などと聞こながらも、じうれむ」とが、ただただ嬉しい。

「あの時には自分は死んでしないだらけれど…」などと聞こながらも、じうれむ」とが、ただただ嬉しい。

淡々と飄々と未来のことを考えて今なすべきことをやり続ける姿を見せてくれる。じうじつた人たちのいるこの地域社会をなんとしても存続させたいと願う。

最後に

南種子町の中学校PTAによって

行われた伝統行事の準備作業での反省会（飲み会）でのことである。どあるPTA参加者は「子供たちは皆、外へ出てひつて帰つてしまひ。この地域は）人が少なくなつて侘びしき。この

侘びしき」という気持ちが君に解るか？」といふ。寂しきといふ表現ではなく、敢えて侘びしきと言つたそだ。

私は当面この意味を考えてみようと思つてゐる。

種子島ひーサポートセンター

事務局長 西 豊



「タロとロマンのハーフームアイランド」

—自立自生の村づくりを目指す島—

私の住む伊江村

伊江村は、沖縄本島北部の本部半島の北西9kmの位置にあり、人口約4900人の住む一島一村の村です。古くからイメージマッチчу（城山）とジーマニ（落花生）で知られています。北東側には伊是名島、伊平屋島が、南西側には遠く慶良間列島が望めます。島の輪郭はほぼ橢円形状で東西8.4

km、南北3km、総面積は22.77km²です。北海岸は約60mの断崖絶壁が連なり、南側にかけて緩傾斜の地形となっています。



▲伊江村へは、2隻のフェリーが就航

南海岸は、ほとんど砂浜となっていて、島の中央やや東寄りに標高172mの城山がそびえ村民を温かく見守っています。この山の眺望は、かつて沖縄八景の第1位を誇り、その山ろくから海岸にかけては平地で1250haの耕地が拓け、8つの集落で村を形成しています。そのうち、6集落は城山の南側から東西に密集し、他の2集落は北西と西南端にあります。島の地質は、琉球石灰岩土壤からなる弱アルカリ性に属し、有機物腐食に富まず畑地としての耕作は容易ですが、保水力は乏しい地質です。気候は、亜熱帯性で平均気温23℃の暖かく住みやすい気候となっています。伊江島へは伊江村船舶の2隻のカーフェリーが就航し、利便



沖縄県 伊江村 いえそん

▲伊江島遠景

性が高く、年間13万人余の観光客が訪れる賑わいのある島です。3月には新造船フェリーの運航も開始し、より良い船旅を皆様へ提供できます。

伊江村の産業

～農業・漁業・畜産業・特産品～

－農業－

本村は、農業振興を中心とした第1次産業を中心に村づくりの展開を図っていて、多様な品目の農産物が生産されています。比較的平坦な地形で、花き栽培（主に輪菊）、葉タバコ、さとうきび、野菜、島うりつきよう、果樹等が栽培されています。平成12年に電照菊、平成15年にとうがん、平成19年に島うりつきようが沖縄県から拠点産地の指定を受けています。中でも輪菊の生産は作付面積で3番目、出荷合計額では最も高い品目となっています。沖縄県内でも生産額トップとして重要産地として位置づけられています。花き産地の先導的役割を果たしています。平成23年には「伊江村花き選別施設」が建設され、花き農家の労働力軽減につながり生産性の向上や、新規雇用の拡大を含め花き生産の振興に大きく寄与する施設であることから、更なる地域の



▲H15年とうがんも拠点産地に指定を受けている

本村では、畑作に必要な用水は降雨と既設の溜池に依存せざるを得なく十分な用水手当がなされていないことから農業生産が不安定であり、農業振興の妨げとなっていました。この慢性的な農業用水の不足を解消するため地下ダムの工事が進められています。地下ダムを新設するとともに、揚水機、用水路の整備を実施することにより、安定的なかんがい用水を確保し、農業経営の安定に資することを目指しています。

－地下ダムとは－

地下水の流路に止水壁を築造し、琉球石灰岩の隙間に水をためる施設です。畑地や、道路下に造成された後は原型復旧されるため、これまで同様の土地利用が可能です。利用法は貯蓄された地下水を

から日製糖工場が閉鎖し、沖縄本島内の工場に海上輸送していました。輸送コストが高く、生産者から村内での工場設置を要望する声があがり建設になりました。さとうきびを中心とした循環型農業の再構築と地域経済の発展に大きく期待されます。又、国営かんがい排水事業として地下ダムの工事が進められていて、更なる農業生産の向上が期待されます。

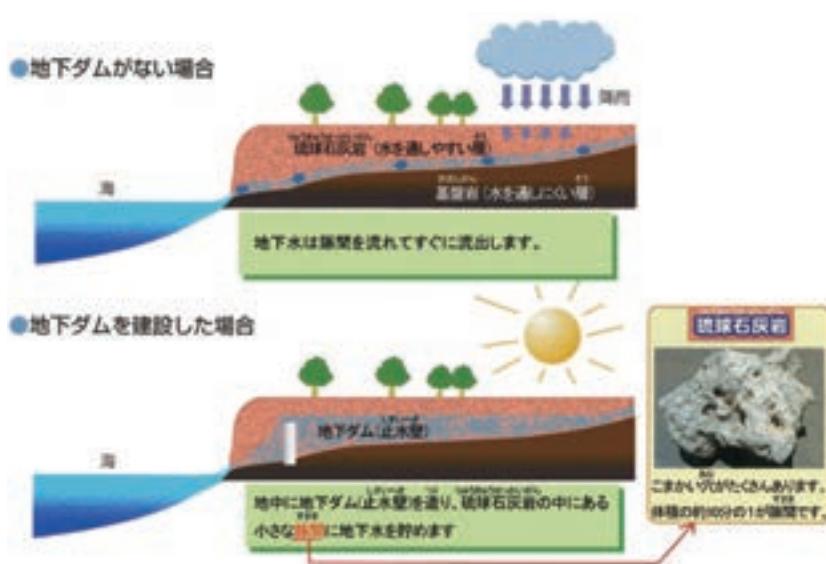
活性化が期待されます。又、さとうきびの含蜜糖を製造する「伊江村黒糖工場」も建設されました。2004年に農家のさとうきび離れに伴う原料不足から日製糖工場が閉鎖し、沖縄本島内の工場に海上輸送していました。輸送コストが高く、生産者から村内での工場設置を要望する声があがり建設になりました。さとうきびを中心とした循環型農業の再構築と地域経済の発展に大きく期待されます。又、国営かんがい排水事業として地下ダムの工事が進められていて、更なる農業生産の向上が期待されます。

伊江村で展開されている 地下ダムプロジェクト

本村では、畑作に必要な用水は降雨と既設の溜池に依存せざるを得なく十分な用水手当がなされていないことから農業生産が不安定であり、農業振興の妨げとなっていました。この慢性的な農業用水の不足を解消するため地下ダムの工事が進められています。地下ダムを新設するとともに、揚水機、用水路の整備を実施することにより、安定的なかんがい用水を確保し、農業経営の安定に資することを目指しています。

－漁業－

本村は四面海に囲まれ天然の漁礁が広がり恵まれた漁場が点在しており漁業も盛んな島です。しかし、水産業を取り巻く環境は年々厳しくなり、燃油の高騰や魚価の低迷で漁獲量は減少しております。また、漁業も盛んな島ですが、必要に応じて確保場まで送水され作物にあわせた散水器具による散水ができます。



▲地下ダムの役割

▲ソディカ漁



績で県認定種雄牛になるなど、肉用牛産地としての沖縄ワンドの普及推進に大きく貢献しています。今後、堆肥センターの整備により耕畜連携による地域資源保全型農業の確立に取り組んでいきます。

一産業から開発される特產品の数

前述の村の産業品を使用し、数々の特產品が生まれました。県内では伊江島と云えどジーマミ（落花生）が有名です。ジーマミを使った数々の特產品。沖縄料理定番のジューシー（炊き込みご飯）にイカ墨をませて作る「イ

傾向にあります。ソディカ漁は比較的安定しているため全体としては微減となっています。今後は、漁船の大型化等が進み安定して漁獲量と漁獲高を目指していきます。

一畜産業

本村の畜産は肉用牛が最も多く、年々多頭傾向にあります。主に子牛产地として県内外からの評価も高く、セリ市も安定した価格で取引されています。わいじ品質系統も沖縄県畜産共進会では常に上位を占め和牛産地「伊江島」として知られ、平成21年には県から拠点産地の指定を受けています。又、伊江村で誕生した種雄牛が歴代最高成



▶牛セリの様子

力墨ジユーシーの素」や、「イ力墨餃子黒ちゃん」伊江島牛を使つた「ソディカ漁」や、ハンバーグ。島の北海岸の波打ち際から湧く真水を使用し作った告白炭酸飲料「イエソーダ」等。主要産業からだけでなく天然の資源を利用した特產品を生み出しています。

一初の地酒

「イエラムサンタマリア」誕生

平成23年「伊江島蒸留所」が開所しました。蒸留所では村内で収穫されたとうきびのしぼり汁のみを使ったラム酒を製造しています。この工場は、元々は企業がさとうきびを原料とした自動車向けバイオエタノールの生産実証実験を行っていたバイオ燃料工場だったものです。実験を終えて村へ譲渡され、有効活用を検討したところ、設備をほぼそのまま転用できることがわかった。ラム酒の製造を決めました。蒸留器を新設するなど一部改修を施し、新工場を完成させました。村内初の蒸留所として稼働しています。

伊江島の誇るもの一つであるテッポウユリを、ヨーロッパの人達はマリアの花として愛されています。それと、母なる神・聖母マリアの名前から「イエラムサンタマリア」と名付けました。大地から授かった大きな愛に



▶初の地酒「イエラムサンタマリア」誕生

包まれたラム酒です。南国の太陽をめいっぱい浴びた伊江島産のさとうきびのしぼり汁のみを使い、単式蒸留器で仕込み、じっくり熟成させたアグリコールラムです。ラム酒は2種類製造していて、オーク樽でじっくりと熟成させたふくよかな樽の香りの「イエラムサンタマリア・コールド」とさわやかなさとうきびの甘じ香りが新鮮な「イエラムサンタマリア・クリスタル」の2種類です。ストレートで、オンザロックでいただぐ他、氷のかじもまた大好評の伊江島発の告白飲料「イエソーダ」で割つて召し上がっていただけます。

くのも格別です。平成23年7月の販売開始から約1万本を売上げ、県知事賞を始め数々の賞を受賞するなど高い評価を受けています。

このように、産地の作物や天然資源を使い数々の特産品を村内一丸となつて産み出しています。

学び創造する未来を目指して ～教育・芸能文化～

～学校教育の充実～

幼稚園2園、小学校2校、中学校

1校の学校教育施設があります。

高校を有しない本村では、ほとん

どの生徒が中学卒業と同時に親元を離れ本島内の高校へ進学します。将来を

担う児童、生徒が心身共に健全で、勉強、スポーツに励むよう小・中学校にパソコンの導入や外国语指導助手の採用など教育環境の整備が整っています。

小さな島であるがゆえに横の繋がりも深く、学校、家庭、地域が一体となって基礎学力の向上、社会生活の指導に努めています。

～芸能文化の保存・継承～

芸能文化のレベルの高い島として知られ、古くからの沖縄各地の民謡や本土の芸能を積極的に学び、さらに島独

特の個性豊かな芸能として発達しています。

「伊江島の村踊」は国の重要無形民俗文化財に指定され、先人の遺した貴重な文化遺産として、村ぐるみで保存・伝承されています。村踊は、琉球王朝時代に、伊江王子のお供をしていた島の若者が習い覚えてきた「本土風芸能」と沖縄本島や先島から伝承してきた「沖縄芸能」、島で創作された「独自の芸能」に分けることができます。島には、数多い村踊を始め、独特な民謡、

琉球古典音楽を取り入れ、沖縄風にアレンジした組踊「忠臣蔵」が県内で唯一、伊江島に保存伝承されています。この「忠臣蔵」は平成22年に県の組踊りが、ユネスコ無形文化遺産代表一覧表に記載され、地方に伝わる組踊りを代表して、国立劇場おきなわにて公演しました。村踊りは毎年11月に村内8区の自治会による輪番制で開催される伊江村民俗芸能発表会で披露されます。

観光地としての伊江島 ～民泊事業・イベント～

本部港からフェリーで30分という利便性の良さから、これまで日帰りの観光客が中心でした。このままでは島への経済効果が薄いということから、平成15年度から始まったのが民泊（民宿体験泊）です。

島の民家でホームステイを体験し、農家や漁業者の仕事を手伝ったり、沖縄料理を学んだりといつ内容の修学旅行の受け入れです。畑仕事や漁を手伝いながら受け入れ民家と絆を深めるプログラムは、大きな反響を呼び、今で

多くの団体が結成され、独自の活動を行っています。青年会や婦人会他、多くの団体があり、学習活動、文化活動、スポーツレクリエーションなど、年間を通して活動が行われています。特に

スポーツを通しての地域づくり、健康づくり、体力づくりが盛んであり、沖縄県国頭郡陸上大会においては、2年連続の男子、女子、壮年、優勝の完全優勝、6年連続の総合優勝を達成する等、老若男女問わずスポーツが盛んな村です。



▶芸能文化組踊り「忠臣蔵」の一幕

～社会教育の充実～

本村は、社会教育活動が盛んで、多

▲民泊見送りの様子



人の心の温かさにふれ島を出発します。民泊生を送り出す際には「やめんなひ」ではなく「ふつむりつしゃじ」「ふつでも戻つておいで」といの思ひをこめ見送ります。島を離れてから交流も続き、リピーターとして島に戻つてくる方も数多くいらっしゃいます。

このように、島の名所や観光地を巡る旅行ではなく、島民と触れ合つことメイノとした旅行プログラムが、島の一大事業に発展し、平成18年度「地域づくり総務大臣賞」を受賞しました。このじつた民泊事業だけではなく、イベント開催で島を訪れる方も多く

人の心の温かさにふれ島を出発します。4月の第3土曜日から「ホール・トン・ウェーク」にかけてリーフィールド公園において日本で一番早いゆり祭りが開催されています。フラー・ア・イラン・ド・伊江島へ毎年約3万人の花見客が来村し、86000人の敷地に20万球100万輪のテッポウコリが辺り一面に咲き、伊江島北海岸の自然と調和した景観を楽しめます。ゆり祭りを初め、伊江島一周マラソン、1000種類のハイビスカスが咲き誇る、ハイビスカス祭り等、様々なイベントが開催されています。

(平成24年3月5日付第27-91号)

沖縄本島から30分という利便性の高さ、自然資源、人の温かさ、イベント、それらを全て活用することによって、年間13万人余の観光客が訪れる賑わいのある島を持続し、今後はさらに観光人数を増やす目標を掲げています。

伊江村長 大城勝正



伊江村は沖縄県島嶼町村制度が施工された1908年に発足し、2008年に村制100周年を迎えた。幾多の歴史と村民のたゆまぬ努力によって、一世紀にわたる「一島一村」のゆるぎない自治を確立し、輝かしい歴史を歩んでもらった。

終わりに



我々の先達は、貧困や戦禍・米軍統治から本土復帰・急速な本土化と基地問題など様々な課題に直面しながらも、常に前向きに村の発展と子供の教育に力を注ぎ、家族や祖先を大切にしながら今日の礎を築きあげてきました。村制100周年を経た今後も、村が歩んだ確かな歴史に思いをはせ、自立の村づくりを目指すとともに、「継承」「調和」「未来」をキーワードに、さらなる飛躍に向かって邁進します。

▶20万球100万輪のテッポウユリが一面に咲く「ゆり祭り」

▶一島一村の伊江島

町村の施策
事例集Ⅲ

全国町村会

